

(三) 神近市子

△貧弱なあまりにも貧弱な神近市子君▽

—

市子君の頭脳を拜見するために、私は全くうんざりするほど、沢山の古雑誌や古新聞を集めた。そして、すっかり参ってしまった。

彼女は、これらの雑誌や、新聞の幾つかの場所で、「自分は小説を書くことをやめる。そして評論家として立つ」ことを、披露している。それにもかかわらず、いかなる評論を彼女は書いたか。

私はここで、ひろく読者諸君に告げよう。市子君が四百字用紙十枚とまとめて書いた研究、調査、主張等があったら、送って下さい。

私の調べたところでは、全然に「無」の一字あるのみ。

二

それでは彼女は、何を書いているか。感想だ。もちろん、感想でも少しも構いはしない。そこに「彼女の頭脳」を見得るならば、大いに結構だが、その時々々の常識のみで書かれてあるものの場合、それを相手にすることは、その時々々の常識を相手にすることではない。女が（男もだが、男は歴史的に恵まれている関係からか、何か一つづつ位、頭脳らしいものを持つて）いることが多い。たとえば市子君の夫君などでも、知識階級の過渡期的文芸の存在理由を主張したりしたことがある（常識以外の何ものでもない観点に立つて、事やかましく、理屈っぽく、述べ立てるぐらい、厭な気のするものはない）。

市子君が、『女人芸術』でやってきた、社会時評のごとき、まさに好個の見本だ。そこには、いかなる意味の高い革命的精神もなく、焼き尽くすような反逆の情熱もない。単なる常識化された理屈があるのみであるが、これをたとえば男の側でいうと、片岡鉄兵のもの（この男などは、かつて、若草や、読売などで、新感覚的の男女観などを、発表していた頃のほうが、ずっと頭脳があった）や、今東光などのものが、少しのアジにもプロにもならぬ、それだけの力をもたぬ、常識（教えられた）からの単なる理屈でしかないのと、すっかり同じ部類なのだ。

教えられた常識、そうだ、この言葉が最もよく当てはまる。それも無邪気なのならよいが、必ず、こいつらのそれには利己的の動機が、ひそかに裏づけられている。然し、それはとにかく、今東光、片岡鉄兵ですらも、その範囲内で、何らかの主張はもち、意見ははくが、（たとえば山川菊栄君が、夫君的思想の範囲内で何かの意見をまとめたものにして表現するように）市子君にはそれすらがない。

自称評論家としての理由がどこにあるか？

彼女の書いたものを、御丁寧にも、年代順に並べて、長く嘆息す！ である。

こうして年代順に並べて見ると、アナキズムやサンジカリズムが常識であった頃の彼女は、それらしい顔付きをしているのである。女流小説家が輩出した頃の彼女は、嘗々と作を試みている。爾来、彼女は小説作家たんとする野心を、かなり長く持ちつづけてきたらしい。その後山川均の方向転換論が出たりして、政治運動が時流を形づくるや、彼女も当然無産党に同意し、極左共産主義が流行の頂上にあつた、昭和三年から四年までの短い期間にあつては、彼女は盛んにロシアを謳歌し、共産党を支持するらしい口吻を洩らした。そして今は？ 私の見るところでは、今彼女は、時流の向かうところの何であるかを、観測中であるのだ。

何が彼女をこうさせるか？

四

彼女に情熱ありや？ あり！ それは甚だ利己的な情熱である。それは、彼女をして、「時流」をねらわしめ、作「家」を志さしめ、評論「家」を自称せしめる。

従つて彼女は、その意味の關意に燃えているが、この關意に燃えている点（たとえそれが利己的の意味にしろ）だけはたとえは北村兼子などと共に、いささかわが国女流中、認むべき価値ありとすべきだろう。

だが、もちろん間違つた關意なのだから、常に近視的の視野の中に、それ自身の表現をもつ。

たとえば彼女は、かの馬鹿者秋田雨雀のそのような意味での、ロシアおよびコミニストの太鼓持ちである。（またはあつた）

彼女が意識的に、そうなりだしたのは私の記憶にまちがいが無ければ、昭和三年の初め頃、普選の実施と共に、労農党に対する小兒病的、近視眼的の崇拜が、特にブチブル知識階級の間（誰が大山氏の当選をブチブルに基調すとて貶すものぞ。ポルのイデオロギーは、始めからそして常にブチブルに基調し、ブルジョア商人によって支持されるものなることを知れ）広まつたとき以来である。

そして彼女の、その意味における、おそらく最初のお目見えは、同三年三月の「女性」の「新しき恋愛理論について」の中で、コロンタイの『赤い恋』を批評し、「コロンタイ

の創作を通じて、私どもに最も深い反感を覚えしめるのは、ネップマンでもブルジョアの婦人でもなくしてアナキストであることは不思議である」といつていることである。彼女はそれに続けて、「然し、退いて考えて見ると、ネップマンやブルジョアは私どもには身元の知れている存在だが、革命の仮面をかぶった、生活というものの何の節度も批判もない分子ほど、人類にとつて忌むべき存在はない」ということをウラジミル（小説中の主人公で、作者コロンタイが故意にアナキストと彼をいつているが、もちろん小説に現われているところでは少しもアナキストではない）に對する批評のように見せかけながら、「アナキストとはかくの如きものだ」ということを白々しく吹聴している。

かつて、アナキストのような顔付きをしていた彼女が、故意にこんなことをしたのは、前にいったように、もちろん、近視眼的の視野における利己的利益（眼前の利益）に釣られてのことではない。

五

『女人芸術』（昭和三年九月）の社会時評では、市子君は、秋田君の有名な売淫婦説、（ロシアには売淫婦なしとする説で、この説は、ロシアからの帰国者によつてさんざんに笑われてしまった。彼等はロシアには、革命以前よりも、もつと多く売淫婦がいると言うのである）を弁護している。（けだし、マルクスボーイどもの支持を見越して）それによ

ると、いわく、なるほど革命ロシアにも売淫婦はいるだろう。だが「奴隸的存在としての売淫婦」と限定された上であれば、売淫婦なしの説は何ら不当ではないというのだ。

「奴隸的存在としての売淫婦」とはどんなものかというところ、亀戸のその如きもので、早くいえば「抱え制度」のもの、従つてそこでは「抱え主」をも「客」をも大目に見、売淫婦のみが虐待されている。これに反してロシアでは、売淫婦によつて利得するものおよび客を、重く罰し、売淫婦に対しては、その自由を擁護している。つまり「抱え主」制度がなく、（法律的に）「自由私娼」のみがあるということの意味する。「ここにこそ！」と市子君はいうのだ。「ブルジョア国とプロレタリア国との相違点がある」と。

「何いつているかね君」と私はいう。アメリカ、イギリス、その他の多くのブルジョア国を見るがいい。日本のような抱え主制度は、おそらく前代の遺物だろう。「自由私娼」（いわゆる奴隸ならざる売淫婦）こそは、ブルジョア売淫の特徴ではないか。

実に彼女にあつては、かくの如き説——殆んどコンマ以下の説が、大部分を占めているのだ。すなわち、これは彼女がその時々の時流に投ずるためにのみ、文を作っているからだ。

この方法は、安易で、しかも酬われることは大きいのだ。ブルジョアやアナキストのいうことは、皆、反動的で、コミニニストのいうことはどんなことでも本当だとさえ書けば喝采はまちがいはないから。

その同じ雑誌の中で彼女は、「非政治論の側の人々は、余りに自己の伝統的立場に執し過ぎ、余りに相手を知らない恨みがなくもない、——もつとも政治的理想が、腐敗堕落をした場合を指摘されればそれは無いでもない。第二インターナショナル（社会民主主義）の堕落がそれで、よくこれは引かるる例であるが、しかしそれだから日本の無産党も直ちにそれだと断定することは出来ない。それに日本の無産党は第二インターナショナルに対する批判の上に生まれたものである」といって、日本の無産党の堕落しない所以を力説し、非政治主義者の見解をわらっている。

ところが、彼女の批判の対象になつていゝわゆる非政治主義者は、そんならその頃どういふ意見を發表していたかというところ、「彼等が社会民主主義批判の精神に立とうが立つまいが、結果は同じことだ。すべての（純と不純、真とエセとにかかわらず）無産党は、早くいへば社会民主主義そのものであるし、もしくはそれへの過程と、さらにその堕落への宿命的歩みを歩むのみだ」というのだ。

そして、見よ。わずか二、三年も立たぬうちに、すっかりその通りになつたではないか。少くとも、『戦旗』などに執筆する彼女として、前の言を繰り返す勇氣ありや否やだ。今や「日本の無産党」もちろん彼女が前に意味した合法党は、第二インターナショナル批判の上に立つとか、純理的イデオロギーとかの問題を超越し、「無条件合同」などというこ

とが、少しの不思議もなく論じられる立場へまで堕落してきている。これは非合法派（この党派は無産党の主流から蹴落されている）によつて批判され、悪罵されつつあるように、明らかに「社民主義への堕落」である。つまり、普選実施と共に出現した（いゝわゆる公然と）我国無産党の主流は、いまやかくの如く、社民主義化し、「単一合同」なんかいつて、イギリス「労働党」あたりを、目がけようとしても、「労働党」があれば、先きは見えているのだ。

かくて、無産大衆よ！ 今こそ政治主義の悪夢を醒ますべき時だ！ そして、今こそ権力否定の旗高く翻し、自治自主の運動を力強く打ち建てべき時だ。

七

ページがなくなつた。市子君の頭脳のあまりにも、貧弱だったのに、うんざりして、張り合ひなく擱筆する。

(四) 中本たか子

〈露出症的中本たか子君〉

一
私の友人が、読売新聞の記者から聞いたという話では、初め中本君は読売の短篇に当選した。社では中本という女はどんなのだらうと噂していると、白粉をデコデコに塗つたのが訪ねてきた。だから面白半分に、彼女の提灯を持ちだした。それが彼女をして出現せしめた最初だと。

二

こうして出現した彼女を、さらに一層ポピュラーにしたのは、『女人芸術』昭和三年三月発行の「自伝的恋愛小説号」であつた。「鈴虫の雌」と題する小説は、エロチシズムに投ずるものとされた。同じ雑誌には、この外にもエロチックな多くの作品があつて、散々にわらわれ、何ら理論の裏づけをもたぬ浅はかな露出症的モガの群だとされた。気の弱い文学少女諸君は、この一度の試みで、そして批評で、すっかり怯えてしまったようだが、もちろん彼女もその一人であつた。

三

彼女が理論ということを考え、お猿の人真似のような論文を書きだしたのは、特にこの以後のことだ。

彼女の教科書は、その頃流行の「形式主義」だつた。これはブル娘としての彼女には当然だつた。

彼女は横光利一や、久野豊彦を読み、「明朗」とか「メカニズム」とか「フォルム」とか「力学」とか「シュールリアリズム」（フランスのブル男どもの寝言でその頃日本のブル小僧どもの間に受け入れられていた）などということをやつた。

四

彼女は「我々の美感を触発さすのは内容でなく形式だ」といつたが、果せるかな、一年後のマルキスト化や、である。

いったい彼女に限らず、ブル娘の（息子も）プロレ化は、「美感の触発」を原因とする。そうした手合いは、陰忍と苦渋との労働（精神的肉体的）には向かぬが、テンポと明朗との闘士的雰囲気には真つ先きがけた。それにマルキシズムは、それらの感傷的ブル小僧群を、尖鋭分子の名で祭り上げるのだから。

五

かくて彼女が、形式主義からマルキシズムへ鞍がえしたことは、彼女にあつては少しの不自然もなかつた。彼女はその前『東京朝日』で、「自分はマルキストになつてもいいが、

それにならぬのは、平林たい子の下につくのが厭だからだ」といつていたほどだ。つまり「いつでもマルキストにはなれる」「なつてもいい」彼女だったのだ。

さてこういふ彼女およびその類似者が、プロレに鞍がえするや、「美感」意識の極度の高鳴りは、「太平洋サカマク怒濤」のそのごとくだから厭になる。

六

今年（昭和五年）の二月号『婦人サロン』に、「母よ嘆くな！」と最大級の文を載せている。それは初めて高等係に見舞われたことを書いたものだ。いわく「とにかく私にとつては初めての経験である。スパイに面会するのは。少々私はうれしくなつて、陽気に応答した。その先生に私はとほけてこう言つてやつた。亀戸警察というのは大変こわいところですよ。——それからじぎ彼は帰つて行つた。私は急に資格がついたようにうれしくなつてきた。その下からある厳しい声、いよいよ敏感な警戒を要するぞ——とその声私が私を叱る」

ふふ、何が敏感な警戒だね。

七

ところで彼女の紙上昂奮（露出症的）はまだつづく。いわく「母よ嘆くな！ 私は御身

の温かい胸から飛び去る。そして永遠に故山の土は踏まないだろう。私は進む、真理の国へ！」

かつての彼女は「感情」を軽蔑し、それは古い時代のものだと言つたが、ここに現われているのは、その古い時代以外の何ものでもないではないか。

それに「永遠に故山の土を踏まないだろう」などと、たかがスパイが一度見舞つたからといつて、壮士役者のセリフめいたことは言わずもがなだ。「永遠に」なんて言つても、いつ踏んでしまふか知れないし、みつともないではないか。

彼女、ニコニコ縋を着て亀戸にいること数ヶ月、今や菊富士ホテル（ブル文士のお得意のホテル）に「静養」しつづつ、再び小説を書くことに（彼女は亀戸へ行くとき心機一転した筈であつたが）逆戻りしたという。馬鹿な女だ。